文化財愛護
シンボルマーク

カヤマ遺跡試掘調査報告書

――早牛ほ場整備工事にかかる
事前試掘調査――

写真1　東側船山山腹より現場を望む

1982

青谷町教育委員会

カヤマ遺跡試掘調査報告書
青谷町教育委員会

序　　文

このたび、早牛ほ場整備事業が計画実施されることになりましたが、この地は「カヤマ千軒」という呼び名で伝承されており、埋蔵文化財の包蔵が予測される地であります。

したがって、埋蔵文化財が整備事業の工事によって破壊される恐れがあるので、事前調査が必要であると考えまして、町文化財保護審議会の意見を聴取し、現地調査を行ないました。

その結果、事業実施予定地内の各所で土器片の散布を確認しましたので、保護対策を講ずる必要がある旨の決定がなされ、国・県の補助を得て、昭和56年6月試掘調査に着手しました。試掘作業は順調に行なわれ、現時点におきましては一応の成果を挙げることができました。

調査にあたりましては、県教育委員会文化課の適切なご指導とご助言、調査主任を引受けていただいた山形顕応氏のご協力、調査団員・作業員の努力、ほ場事業関係者の方々のご理解の賜と厚く感謝申し上げる次第であります。

尚、試掘調査によって発見された住居跡等は、遺跡の保存を前提として設計変更を行ない、将来に伝えるよう努力いたす所存であります。

昭和57年3月13日

気高郡青谷町教育長　塩　　修

調査関係者一覧

調査主体	青谷町教育委員会
調査団長	塩　　修　（青谷町教育委員会教育長）
調査指導	田中　精夫　（鳥取県教育委員会文化課）
調査主任	山形　顕応　（鳥取県文化財保護指導委員）
調査員	坂根　善男　（青谷町文化財保護審議委員）
調査協力	竹森昭一・滝下武夫（蔵内）　林　修徳・坂根加賀代・平尾幸子（奥崎） 山根喜美代・広吉文子（大坪）　長田美喜子（青谷）
協　　力	田中守隆・竹森智恵子・塩則孝・滝下千歳・山岡哲雄・山根道忠・田中悦郎 谷口利夫・水砂国好・横川長治・塩武信・橋本幸一・土橋春茂（土地所有者）
事務局	田中正夫・山田正年・山根敬一・石谷　允・浜師繁幸（青谷町教育委員会）

例　　言

1．本書は、単県早牛ほ場整備事業の調査に伴い、昭和56年6月15日より翌年3月13日まで実施した、鳥取県気高郡青谷町大字早牛所在のカヤマ遺跡事前発掘調査報告である。

2．調査に際し、田中精夫氏（県文化課主事）に多大な指導と助言と教示を得た。

3．本書に用いた方位は、全て磁北を示す。

4．土壌及び土器の色別は、農林水産技術会議監修「標準土色帖」による。

5．遺物番号は、先の数字は出土のトレンチを、後の数字はトレンチ内一連番号をあらわす。

6．本書は、田中正夫氏の協力を得て、山形顕応が、報告書の執筆、編集、作成した。

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過…… 1
Ⅱ．位置と環境…… 2
Ⅲ．調査の概要…… 4
第1トレンチ…… 6
第2トレンチ…… 6
第3トレンチ…… 7
第4トレンチ…… 7
第5トレンチ…… 7
第6トレンチ…… 8
第7トレンチ…… 8
第8トレンチ…… 8
第9トレンチ…… 8
第10トレンチ…… 8
第11トレンチ…… 9
第12トレンチ…… 9
第13トレンチ…… 9
第14トレンチ…… 9
第15トレンチ…… 10
第16トレンチ…… 10
第17トレンチ…… 10
第18トレンチ…… 10
第19トレンチ…… 11
第20トレンチ…… 12
第21トレンチ…… 12
第22トレンチ…… 12
Ⅳ．出土遺物について…… 13
出土遺物一覧表…… 13
遺物実測図…… 15
遺物写真…… 19
Ⅴ．ま と め…… 22

Ⅰ．調査に至る経過

昭和56年３月、地域産業振興の一環として農地整備事業「単県早生ほ場整備工事」が昭和56年度に実施するよう計画された。

これに伴い、町産業課より、青谷町教育委員会に埋蔵文化財の有無についての協議があり、町教育委員会では工事予定面積61,000㎡について関係諸機関と協議、調査を行なった。当地は「カヤマ千軒」の言い伝えがあり、青谷町内における古代住居跡が発見されるのではないかと思われる。今回の調査区については未踏査地区であったので、田面及び水路等広範囲に踏査したところ、弥生式土器、土師器、須恵器等の土器片散布地であることを発見した。このため、青谷町教育委員会が事業主体として国庫補助を受け、昭和56年６月15日から翌年３月13日まで調査を実施したものである。

調査は、県文化課田中精夫文化財主事、山形顕応主任調査員の指導で、田面に22ケ所のトレンチを設定し調査したものです。このカヤマ遺跡の特色として、中世までの柱穴多数と弥生時代竪穴式住居跡１棟、直径11～12ｍの古墳の一部と思われる計３基の古墳が認められた。

以上をみても青谷町内に古墳時代の住居跡など、古墳文化発生を解明するために重要な一地域であることが考えられ、今後の資料として活用される。

なお、調査を進めるにあたり、炎天下に作業いただいた調査員各位や、地元の方々、また、御協力を賜わりました関係者に対し深く感謝いたします。

青谷町教育委員会　田　中　正　夫

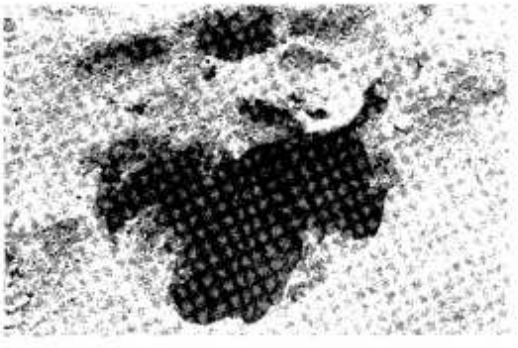


写真２　第２トレンチ柱穴と土器　東より

写真３　第21トレンチ溝状遺構と流入物　東より

Ⅱ. 位置と環境

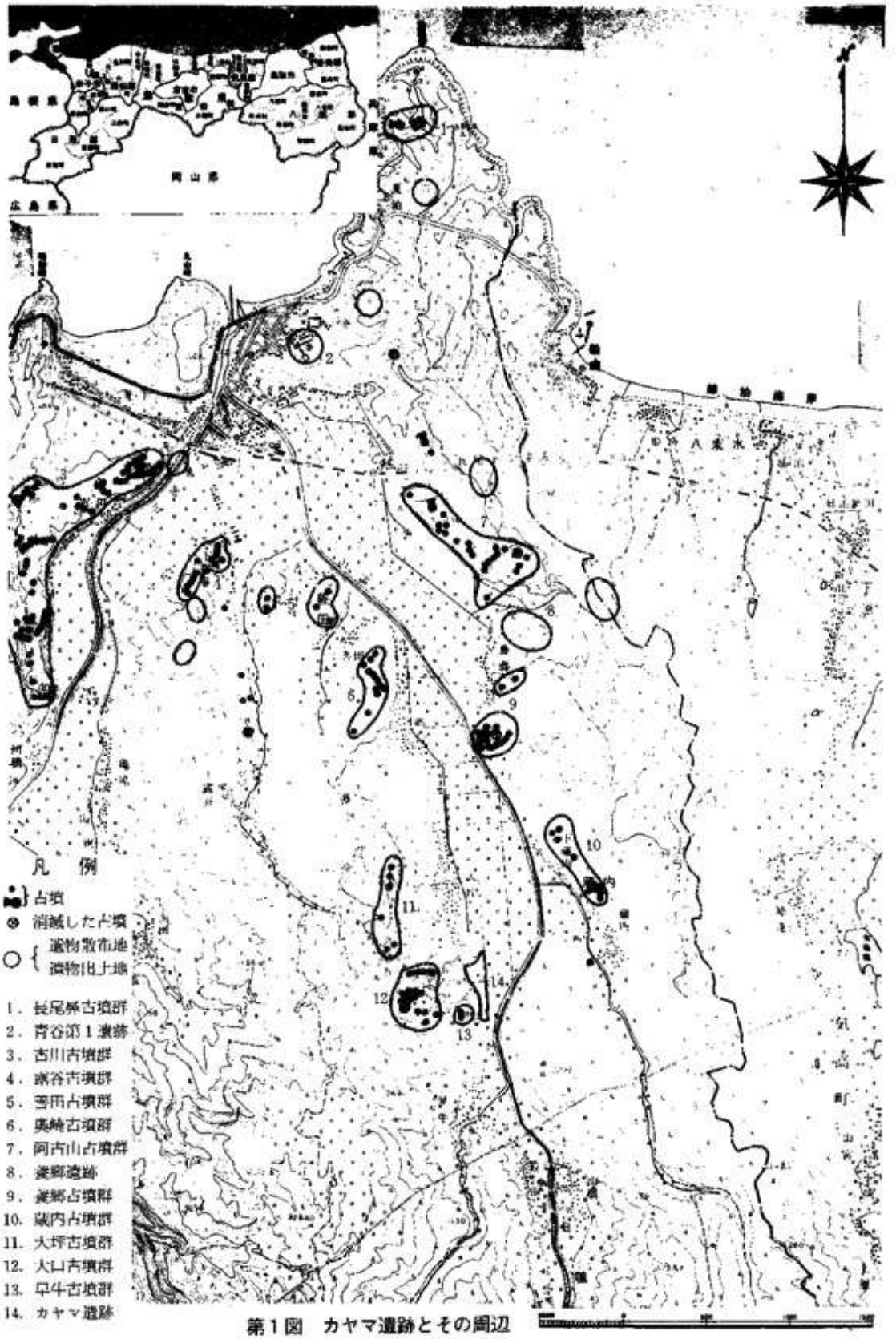
カマヤ遺跡は鳥取県気高郡青谷町早牛に所在し、青谷駅より約3.5km南々東に位置しており、北流する日置川の西岸、早牛部落と大坪部落の中間、村落より離れた農耕地内にあり、低丘陵で東緩傾斜面、標高20m前後の地に存在する。

このカマヤ遺跡の存在する日置川流域には縄文、弥生の遺物出土地や古墳群が点在している。現青谷高校所在地からは縄文後期の土器が出土し、青谷第1遺跡[2]と名付けられ、船の線刻壁画のある吉川22号墳を含む吉川古墳群、[3]その北端相原神社西側には弥生式土器の出土地青谷第4遺跡があり、日置川東岸をみると、長尾鼻古墳群、[1]同遺物散布地、船の線刻壁画で知られる阿古山22号墳を含む阿古山古墳群、[7]阿古山古墳群の北500mに東山古墳、養郷古墳群、[9]蔵内古墳群、[10]西岸には霞谷古墳群、[4]善田古墳群、[5]奥崎古墳群、[6]大坪古墳群、[11]大口古墳群、[12]県文化財保護指導員坂根善男氏報告の早牛古墳群、[13]等々と続き勝部川流域にしても前出の吉川古墳群、[3]長和瀬古墳、紺見古墳群、鳴滝古墳群等があり、更に紺見より経塚も発見された。

当遺跡付近を「カヤマ千軒」と古称する呼び名が伝承されており、直ぐ裏山の大口古墳群、早牛古墳群、更に利川神社という古社、古い五輪塔、鎌倉末期作と思われる宝篋印塔の等等が当遺跡近辺に散見されること、及び発掘対象地の広範囲に亘る田面や水路中から弥生土器片、須恵器片、土師器片等の散布がみられ、古くから人の住みついた地であることが伺えた。

日置川に添って上流に行く、カヤマ遺跡東側に船山と呼ぶ丘陵がそそり立ち、早牛古墳群と城跡があるといわれる丘陵が西側にのしかかり、行く手が狭ばまる。早牛部落で開け、山根部落、河原部落へと少しずつ広がりをみせ、それが小畑部落まで行くと三方丘陵に囲まれた行き止りとなる。以前この早牛、山根、河原、小畑を日置と称し、カヤマ遺跡のある狭路を境に大坪、蔵内、奥崎、養郷等を指して口置谷と称した。地元の人のいわく、早くから日置は栄えておりその口置からみて、青谷海岸に向う方を谷と称したのではなかろうかと。当遺跡「カヤマ千軒」はその谷への入口、開けはじめの位置にある。

写真4　カヤマ遺跡全体を東の船山山腹より望む



第1図　カヤマ遺跡とその周辺

Ⅲ. 調 査 の 概 要

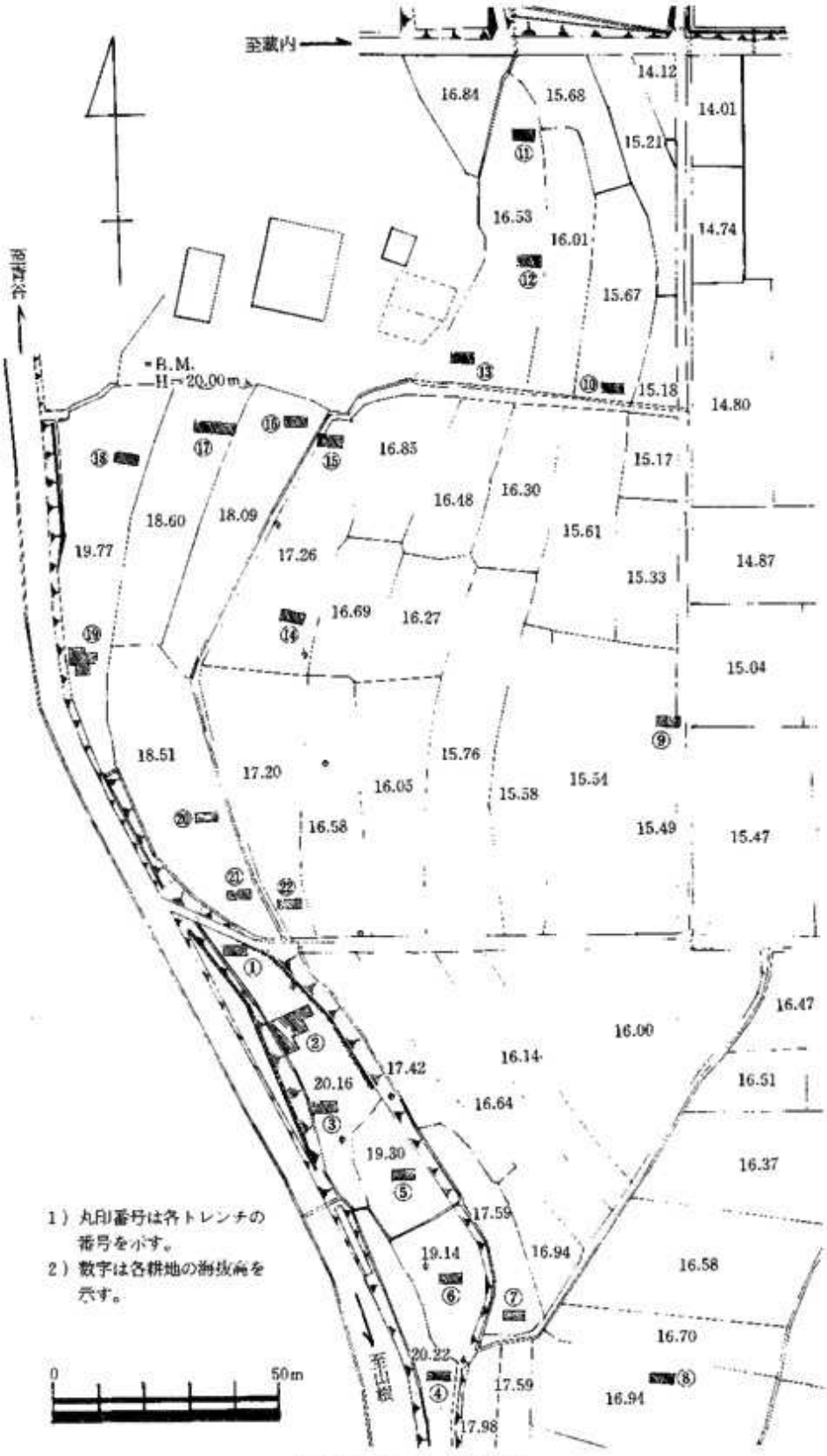
早牛ほ場整備工事設計図によれば、工事予定面積は61,000m²あり、それを14のブロックに分けて、各々のブロックごとに単一ブロック内だけで削平と客土をおこない、個々のブロック内土量にいささかの変化もきたすことなく、14個の平面を作ることが示されていた。そこで各ブロックごとの遺構面まで影響されるであろうと考えられる削平部分約20,300m²に対して遺構の有無並びにその範囲確認のための調査を行うことになった。

調査は最終的に40個まで掘れる可能性を残しつつ、遺構有無の調査として調査地全域に地形を考慮して2m×5m（10m²）のトレンチ18個を設定し、トレンチ番号②、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒の順で掘ることから始めた。試掘の結果②、⑤、⑱、⑲の4カ所から柱穴が検出され、更に⑲からは幼児用と思われる小石棺も検出された。次いで遺構範囲確認のトレンチとして、②の柱穴群遺構に対して①、③、④を、疑念の生じた暗渠遺構を有する⑯に対して⑮を掘り、計4個を掘ったに過ぎなかった。①、③、④の各トレンチからは②同様柱穴遺構が検出され、⑮からは⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑯、⑰、⑱、⑳、㉑、㉒の各トレンチと同様水田遺構が検出された。

出来得る限り遺構を保存しようと、ほ場整備事業団は調査の進渉に合せて協議を重ね、本調査の調査区域縮小のために努力してくれた。そのため範囲確認トレンチの数を増すことなく、遺構らしいものを検出しても確認に至らず中止したトレンチもでてきた。①トレンチは、壁面に柱穴を検出、第6層黒褐色砂質土の下層で古墳期前期前葉と考えられる土師甕を伴った竪穴式住居らしいものを検出したが確認に至らず、⑲トレンチでは小石棺と古墳墳丘との関係及び古墳と住居跡らしい柱穴との関係など確認に至っていない。これらは工事設計変更に伴って遺構を検出した時点で調査を終了したからである。

遺構の検出されたトレンチはすべて現地形標高20m前後の高台水田に存在し、標高18m以下の水田からは水田遺構すなわち旧泥沼が掘り出されたことから、現地形標高20m前後までは、調査地西側の丘陵がテラス状にのびた台地で、泥沼化した湿地帯に接していたと考えられた。なおついでに全トレンチ出土の遺物の面から多い順にあげると、弥生後期後葉、古墳後期、古墳中期、奈良期、古墳前期、弥生後期前葉、平安期全般、近世の順となっていた。この事から台地から丘陵にかけて弥生中期後葉頃から人が住みはじめ、弥生終末期近くに住人は最高となり、古墳期に入って居を他に移しはじめ、平安期全般に亘って極く少数残っていた人達も完全に移住したものと考えられた。

結局ほ場整備工事が遺構面にまで影響を与える地域は、③を含む②近辺と⑱を含むその近辺だけとなった。本調査範囲の縮少はきわめてよろこばしい。


至蔵内
北西方
B.M.
H=20.00m
16.84
15.68
14.12
14.01
15.21
16.53
16.01
14.74
15.67
15.18
14.80
16.85
15.17
16.48
16.30
18.60
18.09
15.61
19.77
17.26
14.87
15.33
16.69
16.27
15.04
18.51
17.20
15.76
16.05
15.58
15.54
16.58
15.49
15.47
16.47
16.00
16.14
17.42
20.16
16.51
16.64
19.30
16.37
17.59
19.14
16.94
16.58
16.70
20.22
17.59
16.94
17.98
新宮橋
0
50m
1）丸印番号は各トレンチの番号を示す。
2）数字は各耕地の海抜高を示す。

第2図　トレンチ配置図

第1トレンチ

トレンチ壁面第6層黒褐色砂質土中に柱穴の落ち込みが見られた。西南角に第7層の橙色真砂土まで掘って確認しなかったが古墳前期前葉と考えられる土師甕を伴った竪穴式住居らしいものを第6層下部に認めた。第5層は弥生後期後葉の土器片を多量含有し明らかに却土と考えられた。

第3図　第1トレンチ

第2トレンチ

はじめは規定大のトレンチを掘ったが後で拡げる。2間×2間の家屋跡。2間×1間の建物跡の2棟分が結び付け可能。柱穴より出土の土器は弥生があり、古墳中期のものも認められた。弥生から古墳中期頃の掘立柱家屋なのか又は客土による柱穴への土器混入なのか判然としなかった。第5層まで一たび削平された時期があり、その後客土して再び家屋が建てられたらしい。

溝状遺構から弥生土器に混じって土師器片の検出も見られた。溝より新しい柱穴もあった。

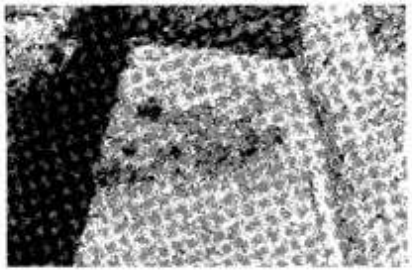


写真5　第1トレンチ東より

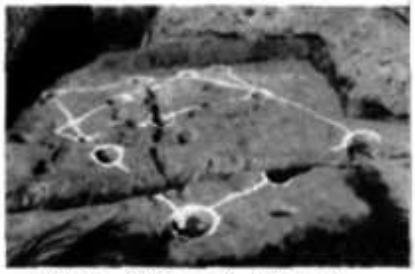
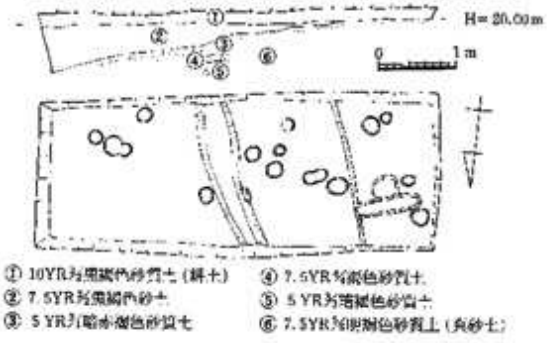


写真6　第2トレンチ西より

第4図　第2トレンチ

第3トレンチ

第2トレンチに比べて柱穴はやや小型化しているが、様相は類似していた。柱穴より弥生土器片、土師器片の出土がみられ、溝状遺構は第2トレンチの溝に連なるものと思われるが、②同様弥生土器に混じって土師器片の出土がみられた。溝状遺構に掘り込まれた柱穴のあるのも同様である。



第5図　第3トレンチ

第4トレンチ

トレンチ西側の丘陵は急斜面をトレンチに向けており、V字型の切れこみ段差があり、あまり古くない時代に地滑りをした様相を呈していた。第3層、第4層、第5層は客土層らしい。そのうち第5層の暗赤褐色砂質土は岩石を伴っており丘陵斜面よりの落ち込み流れ込みの層と思われた。生活面であったと思われる第7層も相当攪乱されていた。第8層明赤褐色砂質土（真砂土）に掘り込まれた柱穴を検出。遺物は第5層と第7層の中間が最も多かったように思える。

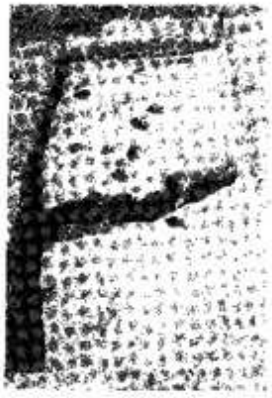
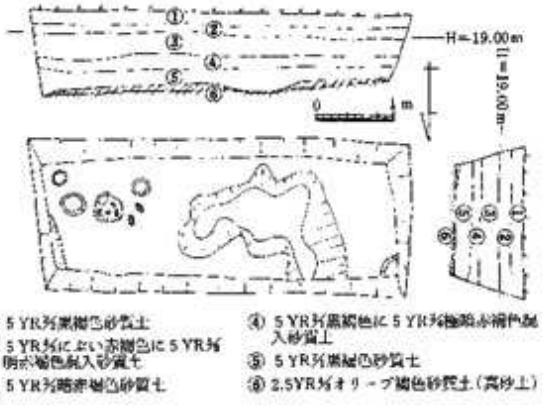


写真7　第3トレンチ　東より

写真8　第5トレンチ　西より

第5トレンチ

第3層は客土相を示していたが、第4層は小枝や枯葉を押し流す谷川の水の溜り場の土質に似て、小枝等の混入が多かった。第5



第7図　第5トレンチ

第6図　第4トレンチ

層は生活層であったらしい。しかし遺物の量は少なく小片ばかりで、柱穴と土拡を検出。東角に落ちこみが観察された。

第8図　第6トレンチ

写真9　第6トレンチ西より

第6トレンチ

第2、第3、第4層共に客土層と思われた。各層平均に遺物の混入があり、このトレンチはわりに大型破片が多かったと思われる。石馬の検出は第4層である。

第7トレンチ

第2層の褐灰色砂質土中少数の弥生片に混じって鉄器の出土をみた。第3層は褐色砂質土で、主として弥生後期の土器小片が出土された。その第3層上面に小粒の礫と砂の混入している層があり、日置川氾濫が考えられた。第4層は泥土層となり、遺構は認められなかった。

第8トレンチ

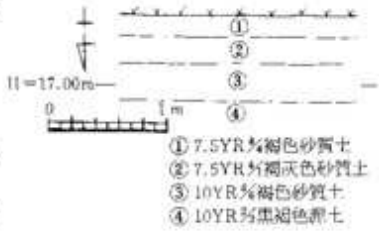
河砂利層の上面に約10cmの河砂層、その上面に水漏れ防止の赤褐色粘性砂質土を約10cmかぶせ、現耕作土を上に置いている。古い時代の耕地化と考えられなかったので土地古老に聞いたが、だれも水耕田化の時期を知らないとのこと。ここは旧河川敷と考えられた。

第9トレンチ

昭和24年頃、砂を大量に投入し腰位まで沈む深田を現耕地に直したとか、現耕土は他耕土と同様真砂土が基盤となっているものの大量の河砂混入が認められた。次層は湿地帯泥土と河砂の混合層、そこに一点の古墳期須恵器片の出土がみられた。第3層以下は泥土層である。

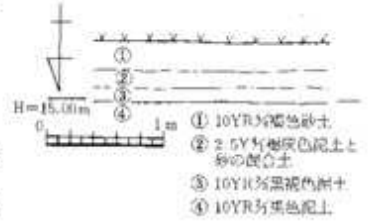
第10トレンチ

河川敷と考えられる砂及び砂利の層を約63cm下に検出した。その上を覆う約23cmの黒褐色粘質土は、それ自体耕土であったのか東北へ向かって走る幅約40cm、高さ約5cmの



第9図　第1トレンチ土層図

第10図　第8トレンチ土層図



第11図　第9トレンチ土層図

第12図　第10トレンチ土層図

写真10　第11トレンチ西より

写真11　第13トレンチ西より

畦畔らしいものを伴っていた。その上部の旧耕土粘質砂土中から古墳期須恵器片数点を検出。

第11トレンチ

現耕土下には厚さ約20cmの客土層が２層あり、２層共に耕作土として使用にたえない程の岩石の破片や山石が混入していた。その客土の下は人頭大に近い山石を用いて、ほぼ一定水準の平面が作られていた。山石等を除去し調査したが、黒褐色の湿地帯泥土層（粘土質）の土層中から何等の遺構も見い出せなかった。おそらく泥土に石を入れて足場をかため、客土を行ったものと考えられる。

第12トレンチ

ここは第11トレンチとすべての面で類似していた。ただここでは湿地帯性泥土の上面を山石等で覆っているのと、２層の客土層があるのは同様であるが、その２層の客土の中間にもう一度人頭大の山石で一つの面が作られていた。ここでも古墳期並びに奈良期の土器片が散見された。

第13トレンチ

ここにも湿地帯性泥土を覆う山石の存在と、２度の客土がみられた。下層客土は山土を持って来たものであろうが、上層客土は湿地帯性泥土に礫や砂を混ぜたものであった。

第14トレンチ

客土は褐色礫砂混入砂質土１回きりであった。この客土上層部から江戸期初頭前後の仏具でなかろうかと思われる磁器片２点の出土がみられた。

第13図　第11トレンチ土層図

第14図　第12トレンチ土層図

第15図　第13トレンチ土層図

第16図　第14トレンチ土層図

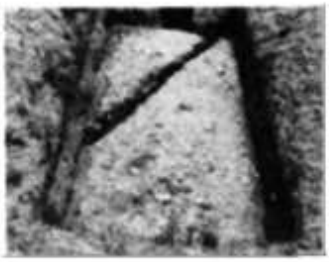


写真12　第16トレンチ西より

写真13　第16トレンチ暗渠

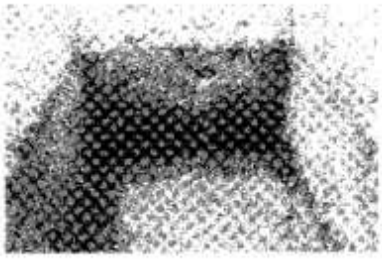


写真14　第18トレンチ東より

第15トレンチ

石を入れて、そのまま耕作し、踏み込まれたものか泥土下約40cmに石の面あり。客土層１層を認める。

第17図　第15トレンチ土層図

第18図　第17トレンチ土層図

第16トレンチ

泥土に石を投入、客土の後、暗渠を石の面より下まで掘り込み、耕作し更に客土したと思われる。暗渠は両側を小石で組み、底面に砂を敷き太さ２cm位の笹竹を敷つめ砂をかぶせ、粘土で覆ったと考えられる。

第19図　第16トレンチ

第17トレンチ

人頭から拳大の山石を泥土に入れ、客土しながら石を踏み込んでいる。一時期その面で耕作したかも知れぬ。後に第三層を客土し、耕作し、そののち更に第二層を客土し、現在の耕作面が作られたと考えられる。普通耕土は客土の際、一時別所に置き、客土後その上を覆いかぶせる。

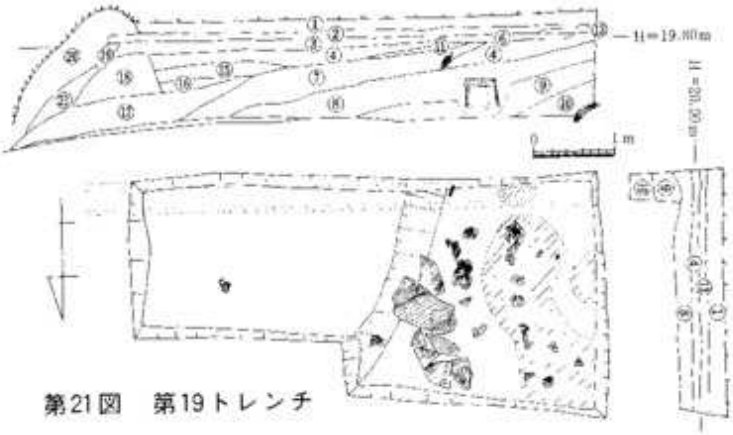
第20図　第18トレンチ

第18トレンチ

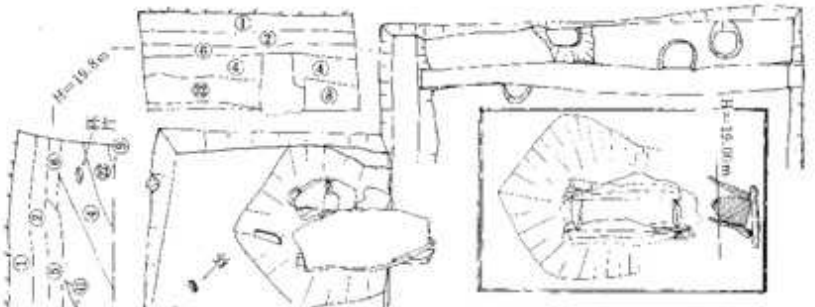
山石を泥土中に踏み込んだ後、客土して耕作を当分続けていたらしい。後に更に山石や岩石を投入し客土を行った。その客土中、土器片が散見された。一時期生活面として使用されたのか炭粉等が含まれ、壁面柱穴痕らしいものが検出された。その後、時期差の少ない３回の客土によって現耕地が形成されている。

第19トレンチ

規定大のトレンチを掘る。上層部より攪乱されていた。トレンチ長辺を西側丘陵に直交させる状態で、ほぼ水平な面を保ちつつ掘るゆえ、面としてとらえにくかったのかも知れぬ。上面より約50cmの所で石棺蓋らしい板石片に当り北西部を拡げる。地表面下約60cmの所ほぼ水平に石棺蓋らしい板石の破片が散乱していた。



第21図　第19トレンチ



第19号トレンチ（第21図）共通土層番号

⑥ 7.5YR 5/4褐色粘性砂土
⑦ 7.5YR 5/6明黄褐色砂質土
⑧ 7.5YR 5/6明褐色砂質土
⑨ 7.5YR 5/4褐色（真砂土を含む）粘性砂土（炭片を含む）
⑩ 2.5YR 5/6黒色（真砂土を含む）黒ぼく
⑪ 7.5YR 5/4褐色砂質土
⑫ 7.5YR 5/6暗褐色砂質土
⑬ 10YR 5/6黒褐色粘性砂土
⑭ 5YR 5/6にぶい赤褐色砂質土
⑮ 5YR 5/8明赤褐色砂質土
⑯ 5YR 5/4灰褐色砂質土
⑰ 5YR 5/6明褐色砂質土
⑱ 5YR 5/6にぶい赤褐色砂質土
⑲ 7.5YR 5/4褐色砂質土
⑳ 7.5YR 5/4褐色砂質土
㉑ 7.5YR 5/4褐色砂質土
㉒ 7.5YR 5/6暗褐色砂質土（土器片を含む）

① 2.5Y 5/6暗灰黄色粘質土（耕土）
② 10YR 5/6黒褐色砂質土
③ 7.5YR 5/4褐色砂質土
④ 7.5YR 5/6暗褐色砂質土
⑤ 7.5YR 5/4褐色砂質土

第22図　石　棺

地層より判断するためにトレンチ南側を幅50cm掘り下げることとした。その溝状掘り下げ部に65cm×30cmの小石棺がひっかかって露出した。石棺南側石棺蓋同水準同地層約1mの所から蓋杯の蓋（19-15）出土、更に南約40cm上へ30cmの所から短頸壺の蓋らしきもの（19-16）出土。トレンチ西側を再調査して、柱穴が検出された。しかし墳丘と柱穴との関係まで調査せず。

写真15　第19トレンチ東より

写真16　東より

写真17　東より

写真18　南より

第20トレンチ

約40cm下は耕土化された旧地山層らしかった。台地より沼地への移行する所と思われた。

第21トレンチ

現耕土化は旧地山真砂土の耕土化された層と思われた。トレンチ東側に旧水路溝を検出、溝中には大雨で流入したのか樹木の枝が全て西側丘陵地をむいて倒れこんでいた。現耕土から掘り込んだと思える暗渠施設もあった。

第22トレンチ

この地域は泥土層が深くなかったのか、直接客土している。その客土も1回のみで現耕土を含めて2回しか行われていない。現耕土から掘り込まれたと思われる暗渠施設のみで、旧遺構の検出はなかった。

湿地帯水田化の客土包含遺物を比較したとき、⑪、⑫トレンチを除いて⑦、⑬、⑮、⑯、⑰、⑱トレンチは初期客土層中古墳期以後の遺物は見当らず、あっても第二期客土層以上の所で混入が認められた。⑪、⑫トレンチ下層客土中からははっきりとはいえないが奈良期と思われる土器の混入があったように思われる。

現耕土下に水耕田の痕跡を認められなかったのは②、③、④、⑧のトレンチだけで、⑤はうたがわしく、⑲は半分近くが旧水耕田であったようだ。

⑧と⑩トレンチ検出の河川敷と湿地帯との関係は自然堤防が検出されず不明のままでおわった。

第23図　第20トレンチ土層図

第24図　第21トレンチ

第25図　第22トレンチ土層図

写真19　第21トレンチ
西より

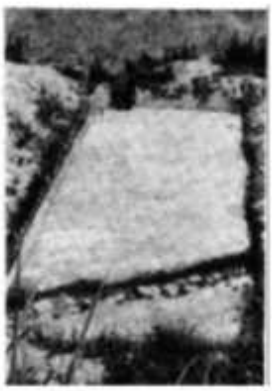


写真20　第22トレンチ
西より

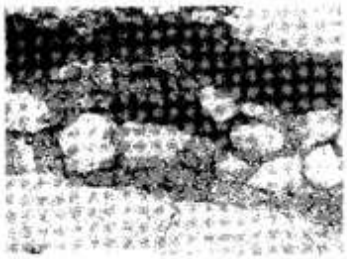


写真21　第22トレンチ暗渠

写真22　第21トレンチ暗渠

Ⅳ. 出土遺物について

今回の調査により各トレンチからの出土遺物は弥生期のものが最も多く、後期前葉から後期後葉、古墳期に入って前期初頭から終末期、更に奈良期から平安期全般の遺物が見られたが、それ以後は跡絶えて近世の磁器類が極く少量散見されたに過ぎなかった。

これら出土された遺物は遺構に伴って出土したのではなく、古い時代に客土されたその客土中からの出土で、遺構に関係あるものとしては、第1トレンチ出土の1—2と第19トレンチ出土の19—15と19—16位であろう。遺構の性格を考える具となるものとして、第2トレンチの溝より出土の2—3、2—12、2—16と同柱穴よりの2—5、2—6位しかない。この項で取り上げた遺物は各トレンチを代表し、実測出来得る遺物のみである。

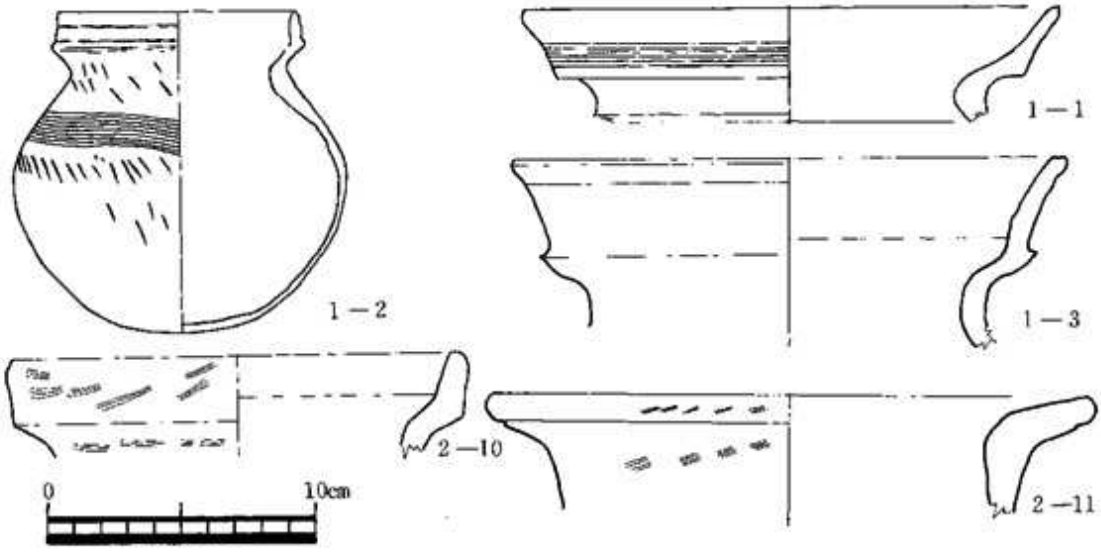
出土遺物一覧表

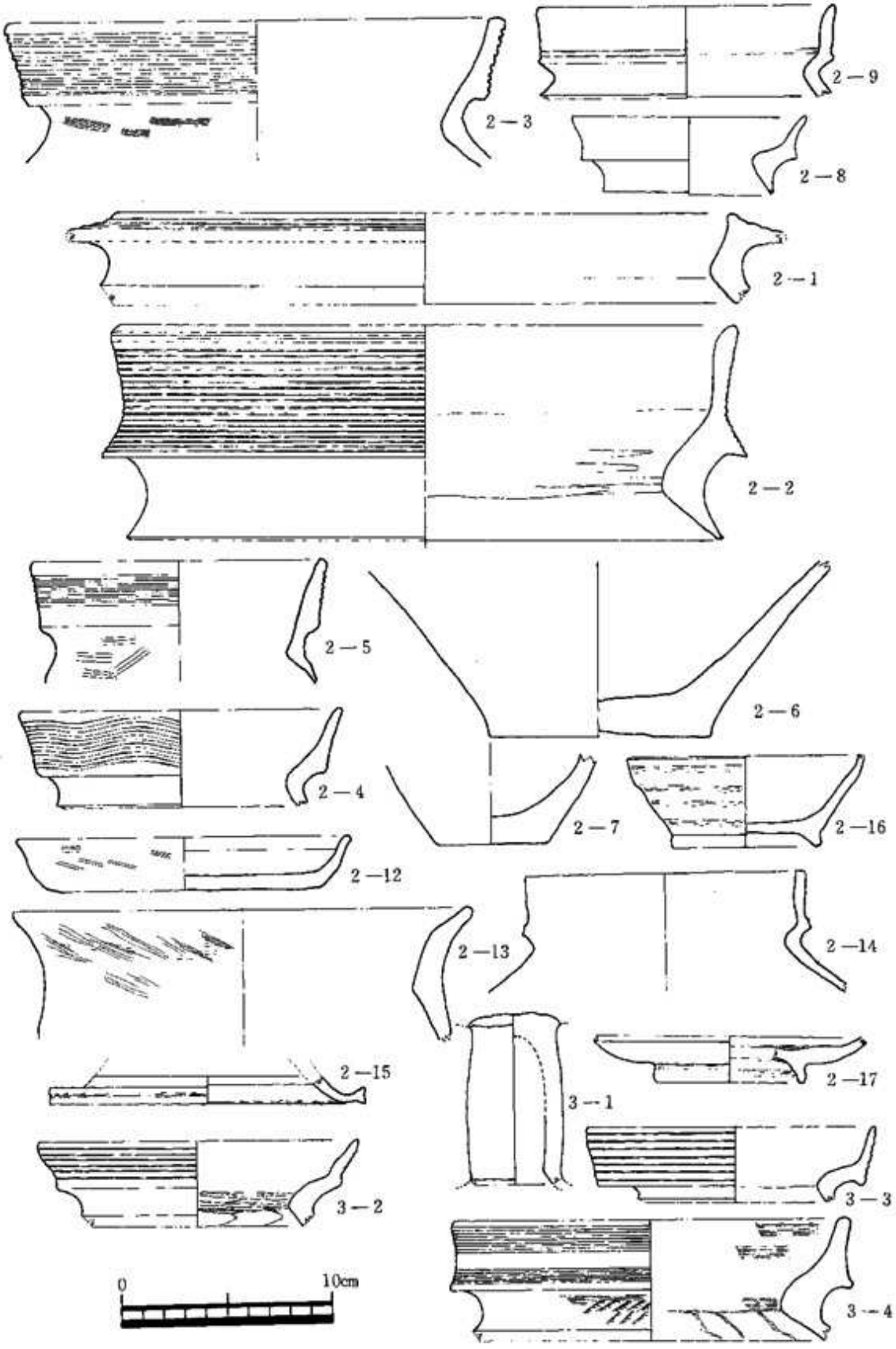
番号	器種	形態上の特徴	成形手法上の特徴	備考
1—1	甕	口径約20cm、口縁部に7条の櫛形沈線紋あり。	整形後外面にベンガラ彩色をほどこしている。	淡橙色、緻密な胎土、焼成は少々軟気味。
1—2	甕	口径8.6cm、器高12.1cm、口縁部2条の沈線あり。	肩部9条の櫛書沈線紋、頸、胴部にするどい痕。	淡橙色、緻密な胎土、焼成良好、薄手な作り。
1—3	甕	口径約20.5cm。	内外共に横ナデ整形。	淡黄灰色、細砂で緻密な胎土、焼成良好。
2—1	甕	口径約29cm、口縁部に4条の沈線あり。	横ナデの沈線は平行で直線的である。	橙色、非常に緻密な胎土、焼成良好。
2—2	甕	口径約29cm、外部化粧土塗布、するどい返し。	内面篦削り整形。	橙色、緻密な胎土、焼成やや軟。
2—3	甕	口径約24cm、口縁部8条の櫛目、頸部刷毛目。	肩部に櫛目波状紋を入れている。	橙色、粒砂多く混入し粗い胎土、焼成良好。
2—4	甕	口径約15cm、12条の櫛書沈線紋あり。	内面摩耗はなはだし。	浅黄橙色、細砂だが少々粗い胎土、焼成良好。
2—5	甕	口径約14cm、摩耗はなはだしい。	櫛目調整後、化粧土を塗布したらしい。	橙色、粒砂を多く含み粗い胎土、焼成良好。
2—6	甕	底径約11cm、底面よりの立ち上りは広くなる。	摩耗はなはだしい。	褐色、粒砂を含み粗い胎土、焼成良好。
2—7	壺	底径5.2cm、底面よりの立ち上り幅は狭い。	みがき整形。	褐灰色、細砂で緻密な胎土、焼成良好。
2—8	壺	口径約11cm。	内面摩耗はなはだしい。	にぶい黄橙色、細砂で緻密な胎土、焼成良好。
2—9	甕	口径約14cm。	内外面共に摩耗はなはだしく整形痕不明。	浅黄橙色、細砂で緻密な胎土、焼成良好。
2—10	甕	口径約16.5cm、口縁部肥大している。	内外共に摩耗し、櫛目判然とせず。	褐灰色、粒砂混入すれど緻密な胎土、焼成良好。
2—11	甕	口径約22.5cm、口縁部外側に約1mmの段あり。	横ナデ整形、器台として使用されていたらしい。	浅黄橙色、粒砂少量含まれた緻密な胎土、良好。
2—12	皿	口径約16cm。	両面に朱の塗布。	浅黄橙色、極く細砂で緻密な胎土、焼成良好。
2—13	甕	口径約22cm、口縁部であまり広がりのない器。	粒砂の混入多いわりに表面はなめらか。	淡橙色、粒砂混入多いが緻密な胎土、焼成良好。
2—14	甕	口径約13cm、口縁部直に立つ。	両面共に摩耗ひどい。	灰白色、細砂で緻密な胎土、焼成良好。
2—15	高杯の脚？須恵器	脚径約15cm、成形乾燥後整形しているらしい。	整形篦削り痕が見受けられる。	灰白色、細砂で緻密な胎土、焼成良好。

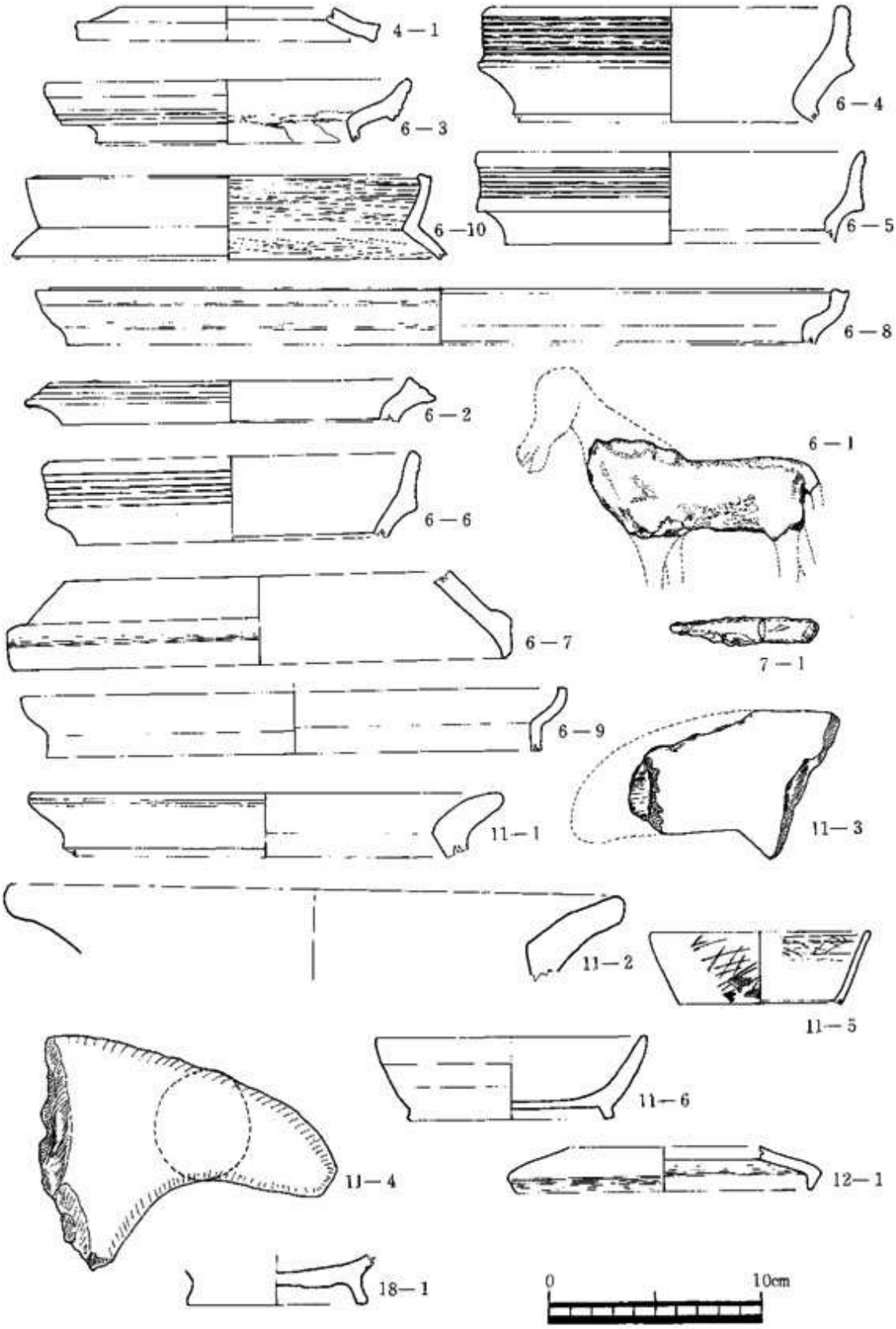
番　号	器　種	形態上の特徴	成形手法上の特徴	備　　考
2—16	杯	糸底径7cm、須恵器様輪積み、粗雑な作り。	焼成な軟なところは、供献用なのか？	浅黄橙色の砂の混入非常に少ない胎土、焼成軟。
2—17	皿、須恵器	糸底径約7cm。	わりとていねいな作り。	褐灰色、細砂で緻密な胎土、焼成良好。
3—1	高杯の脚	上部のつまった円筒形、摩耗はなはだしい。	輪状に篦削り整形と思われる。	橙色、極く細砂で緻密な胎土、焼成良好。
3—2	甕	口径約15cm。	6条の沈線紋、内側頸部に篦削り痕あり。	にぶい橙色、細砂で緻密な胎土、焼成良好。
3—3	甕	口径約13cm、内外共に摩耗はなはだしい。	7条の沈線紋。	浅黄橙色、粒砂を含み少少粗い胎土、焼成良好。
3—4	甕	口径約18cm、内側肩部篦削り、頸部上刷毛目。	外側上部櫛目、頸部刷毛目、肩部櫛型押しつけ。	にぶい橙色、粒砂を含むが緻密な胎土、焼成良好。
4—1	高杯の脚	底径14cm、水簸の土を使用しているらしい。	みがき整形後朱を塗布。	浅黄橙色、砂気のない緻密な胎土、焼成良好。
6—1	石　馬			灰白色で須恵器そっくりの石。
6—2	甕	口径約17cm、口縁部に3条の沈線あり。	ナデ整形。	橙色、粒砂多く混入すれど緻密な胎土、焼成硬い。
6—3	甕	口径約17cm。	布によるナデ整形か？篦削りもみられる。	浅黄橙色、粒砂を含み粗いが緻密な胎土、硬い。
6—4	甕	口径約17cm、8条の沈線あり。	化粧土を付けている。	明褐色、細砂で緻密な胎土、焼成良好。
6—5	甕	口径約18cm、全体に摩耗はなはだしい。	7条の沈線あり。	黄褐色、細砂と粒砂を含む粗い胎土、焼成やや軟。
6—6	甕	口径約17cm、6条の沈線紋あり。	酸化鉄含有の化粧土を付けている。	明褐色、ざらつく砂の多い胎土、焼成良好。
6—7	器台の脚？須恵器	径約23cm。	布にてナデ整形したと思われる。	灰色、粒砂を含むが緻密な胎土、焼成硬い。
6—8	か　ま須恵器	口径約37cm。	布によるナデ整形。	灰白色、非常に細砂で緻密な胎土、焼成良好。
6—9	か　ま須恵器	口径約25cm。	布による横ナデ整形。	灰白色、極く微細で緻密な胎土、焼成良好。
6—10	か　ま須恵器	口径約18cm、外部はおさえつけ成形。	内部刃幅のせまい刃物でけずり整形。	灰白色、非常に緻密な胎土、焼成非常に良好。
7—1	鉄鏃or刀子			鉄鏃乃至刀子らしい。
11—1	甕	口径約22cm、成形後みがき整形をしている。	内面にすすを付けている黒色土器か？	にぶい褐色、粒砂含めど緻密な胎土、焼成良好。
11—2	甕　？	口径約29cm。	本来煮炊用具として作られたものらしい。	にぶい橙色、粒砂多く粗い胎土、焼成良好。
11—3	かまど取手	手掌圧成形。	0.3—0.5cmの厚さに化粧土を付着させる。	褐灰色、粒砂を多く含んだ胎土、焼成良好。
11—4	かまど取手	手掌圧成形。	小角石、粒砂混入土。	浅黄橙色、緻密さに欠ける胎土、焼成良好。
11—5	茶わん磁器	口径約10cm。		明緑色の釉薬、絵はあい色でえがかれている。
11—6	杯、須恵器	口径12.5cm、器高3.9cm。	水挽きらしい。	灰色、非常に細砂で緻密な胎土、焼成良好。
12—1	蓋杯の蓋須恵器	蓋径約14cm。	水挽きらしく、ナデ整形もうかがえる。	灰色、水簸土なのか緻密な胎土、焼成良好。
18—1	杯、須恵器	糸底径約8.5cm、糸底高高し。	底部のたち上りにより、Ⅲ—3に比定。	灰色、非常に細砂で緻密な胎土、焼成良好。
19—1	甕	口径約19.5cm。	櫛目調整後朱を塗布。	にぶい橙色、粒砂を含むが緻密な胎土、焼成良好。
19—2	甕	口径約18cm。	内側篦削り、上部篦みがき整形がなされている。	灰黄褐色、細砂で緻密な胎土、焼成良好。
19—3	甕	口径約16.5cm。	ナデ整形。	浅黄橙色、非常に細砂で緻密な胎土。

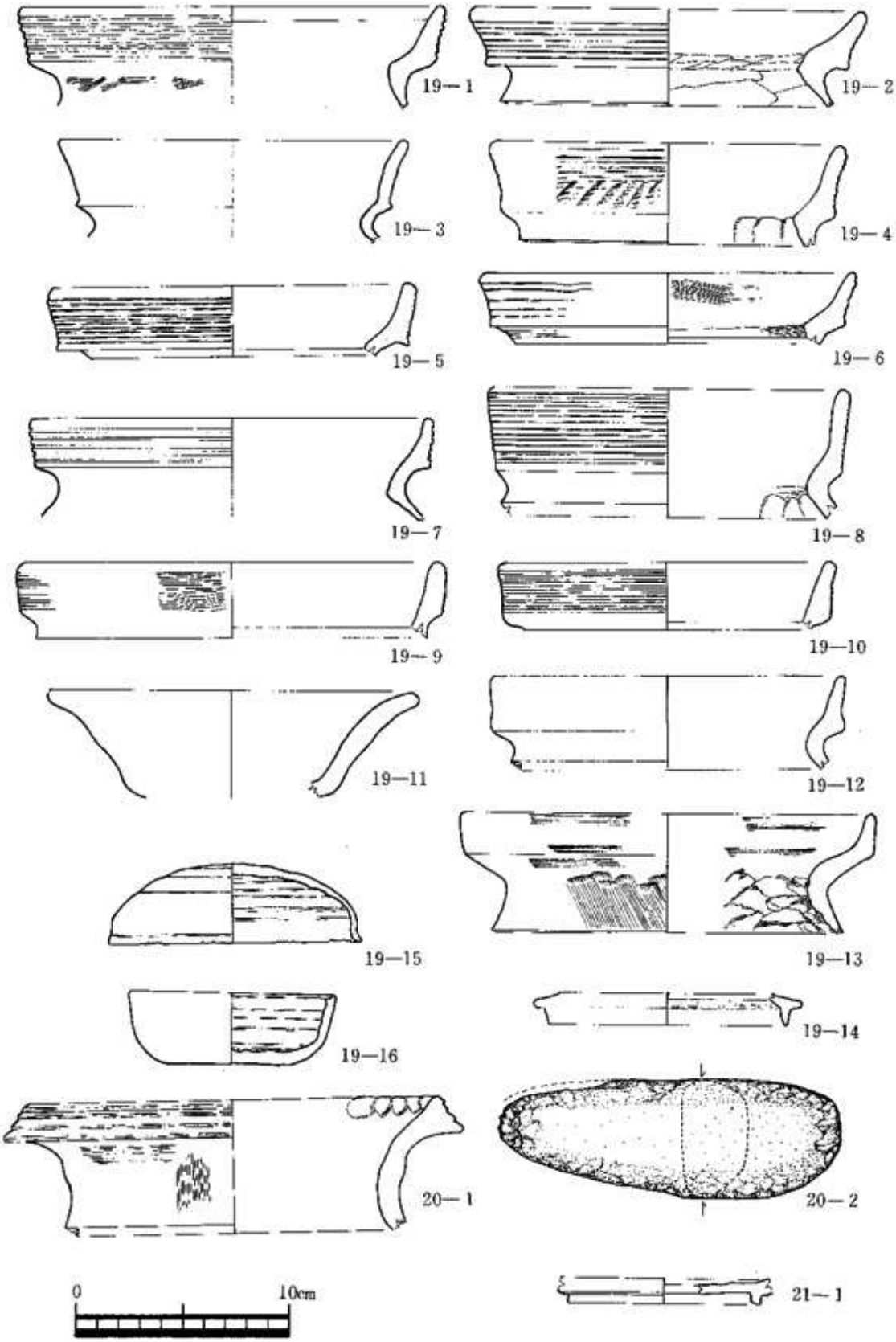
番号	器種	形態上の特徴	成形手法上の特徴	備考
19—4	甕	口径約16cm、外部櫛型沈線紋、櫛型押しつけ。	内側、頸部指頭圧整形、その上部はみがき整形。	明赤褐色、粒砂を含む粗い胎土、焼成良好。
19—5	甕	口径約16cm、外部横ナデ櫛型整形。	内側みがき整形。	橙色、粒砂を含むが緻密な胎土、焼成良好。
19—6	甕	口径約17cm、化粧土を塗布、櫛型沈線紋入れ。	内側刷毛目整形痕あり。	にぶい橙色、粒砂を含むが緻密な胎土、焼成良好。
19—7	甕	口径約19cm、5条の櫛型沈線入り。	摩耗はなはだしく調整不明。	橙色、細砂で緻密な胎土焼成良好。
19—8	甕	口径約16cm、横ナデ、その上面を櫛型沈線紋。	内側、指頭圧整形、及び篦削り整形。	橙色、粒砂を含むが緻密な胎土、焼成良好。
19—9	甕	口径約19cm、内部摩耗はなはだしい。	外部横ナデ、櫛型整形。	橙色、粒砂を含み、わりと緻密な胎土、やや軟。
19—10	甕	口径約15cm、成形後内外に化粧土塗布。	櫛型整形。	橙色、粒砂含めど緻密な胎土、焼成良好。
19—11	高杯	口径約15cm、摩耗ひどい。	内外面共に朱を塗布。	橙色、粒砂多く含み粗い胎土、焼成良好。
19—12	甕	口径約16cm、内外共に摩耗はなはだしい。	不明。	黄橙色、粒砂を含むが緻密な胎土、焼成やや軟。
19—13	甕	口径約19cm、外側頸部等刷毛目、肩部以下櫛目。	内側刷毛目、頸部以下剝離、器台として使用か？	橙色、粒砂を多く含むが緻密な胎土、焼成良好。
19—14	蓋杯の蓋？須恵器	6世紀中葉の杯身とみたが角度が違う、口径11cm。	成形後篦削り、指頭ナデ整形がほどこされている。	灰白色、細砂で緻密な胎土、焼成良好。
19—15	蓋杯の蓋須恵器	器高3.7cm、口径11.8cm、口縁部外側に広がる。	薄手仕上げで形態がととのっている。	灰白色、細砂で緻密な胎土、焼成良好。
19—16	杯、須恵器	短頸壺の蓋に似ている、高さ3.3cm、口径9.8cm。	ナデ整形。	灰白色、粒砂を含み胎土は緻密な方、焼成やや軟。
20—1	壺、表採	口径19cm、環積み成形、器台としての使用痕あり。	内側指頭整形、外側頸部刷毛目調整。	灰白色、粒砂混入すれど緻密な胎土、焼成良好。
20—2	石器、表採			長楕円形をし、両端に打撃による打欠き痕あり。
21—1	皿？須恵器	糸底径9cm、篦切り後糸底を付ける。	篦削り、ナデ整形。	灰白色、粒砂を含めど緻密な胎土、焼成良好な方。

遺物実測図




2－3
2－9
2－8
2－1
2－2
2－5
2－6
2－4
2－7
2－16
2－12
2－13
2－14
2－15
3－1
2－17
3－2
3－3
3－4
0
10cm


4－1
6－4
6－3
6－10
6－5
6－8
6－2
6－1
6－6
6－7
7－1
6－9
11－3
11－1
11－2
11－5
11－6
11－4
12－1
18－1
0
10cm


19—1
19—2
19—3
19—4
19—5
19—6
19—7
19—8
19—9
19—10
19—11
19—12
19—13
19—14
19—15
19—16
20—1
20—2
21—1
0
10cm

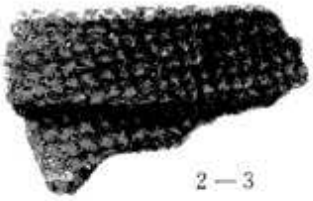
1—2

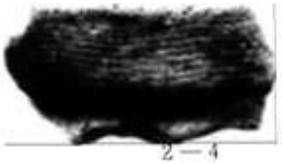
1—1

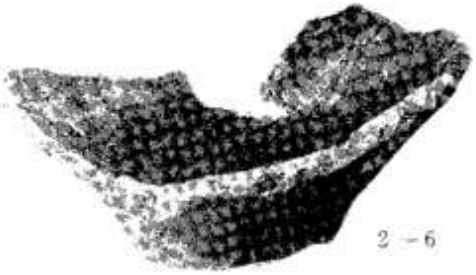
1—3

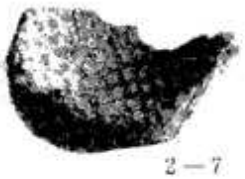
2—1

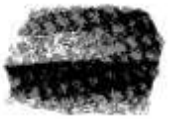
2—2


2—3


2—4


2—6

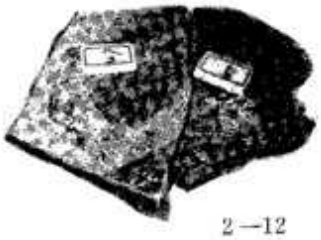

2—7

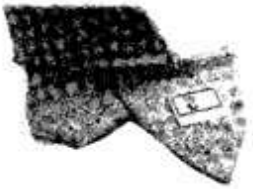

2—8

2—9

2—10

2—11


2—12


2—14

2—15

2—16

2—17

3—1

3—2

3—3

3—4

4—1

6—1　イ馮

6—2

6—3

6—4

6—5

6—6

6—7

6—8

6—9

6—10

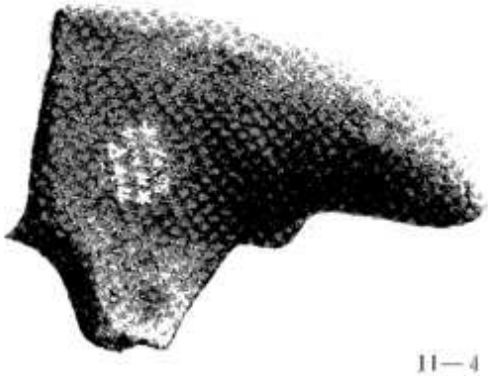
7—1　鉄器

11—1

11—2

11—3

11—5　磁器



11—4

11—6

12—1

18—1

19—1

19—2

19—3

19—4

19—5

19—6

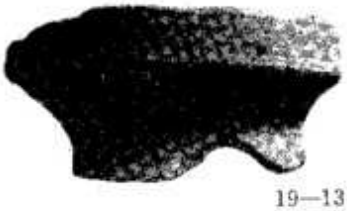
19—8

19—9

19—10

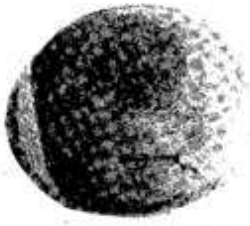
19—11

19—12



19—13

19—14



19—15

19—16

21—1

20—1

20—2 石

V. ま と め

全調査区域中、字北田の西端、字坂原の全域に亘って、更に字カヤマの字平塚添いなど現地形標高20m前後以上の台上には弥生時代中期後葉頃から人が住みはじめ、平安時代初頭ごろまで人々が住みついていたらしいことが、トレンチ検出の柱穴や石棺で、更に遠方から運ばれたとは考えられない沼地埋め立ての却土中より出土の遺物類から伺われた。全トレンチ出土の遺物を凡そであるが分類してみたところ、弥生後期後葉の遺物が全体の3分の1近くを占め、次いで古墳後期から終末期にかけて、古墳中期、奈良期、古墳前期、平安期前葉、近世乃至現代となっていた。但し近世乃至現代磁器は現耕土直下次層上面よりの出土であった。ついでながら遺物の検出が1点もなかったのは⑧トレンチだけである。

調査地泥沼の埋め立て時期を言い伝えや古文書に求めたが見当らず、調査地近辺の地名から田地関係、地形関係の字名を拾いあげてみた。日置谷村大字大坪、日置村大字早牛字藤田、同字北田、同字坂原、同字カヤマ、同字柳の前等が関係ありそうな地名であった。ちなみに各トレンチの属する字は①、②、③、④、⑤、⑥が字坂原、⑧が字カヤマ、⑦、⑨、⑩、⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒が字北田、⑪、⑫が字藤田である。条里制に関係があるかも知れぬと拾い上げた大坪、藤田、北田を考察すると、大坪は日置谷に属し、日置と日置谷との関係として古来日置は日置谷より古くから開けていたという言い伝え、更に地形的に丘陵裾野微高地で古くより田地となっていてもよいところ。藤田は疑問で、この地籍の大半は丘陵地に属していたはず。北田は早牛の北にあり、古く造出されたと思われる点があり、現在三角形をしているが、面積はほぼ2町歩強、条里制の可能性あり。大坪、北田共に条里制がとられたとすれば、平安初期以降の遺物出土の見られなかったことが頷ける。他に坂原は微高地及びゆるやかな斜面を占め、カヤマは谷合中央部を占める幅100m長さ300m位の広さで藤田の東側中河原に接し、北田、坂原、平塚の東側に接している広い地域で東側に柳の前を挟んで日置川がある。旧地籍図によるとカヤマ地籍のほとんどは明治26年荒地となっている。おそらく湿地帯でトレンチ⑧のように日置川流域に当っていたものと思われる。「カヤマ千軒」の古来伝わる言葉は、芦等が生い茂っている細長い地域を指し「カヤマ千間」でなかろうか。そこで日置川流域に生い茂る柳の樹木のある近所を「字柳の前」と言った意味がわかる。

北田等の沼地初期埋め立ては、奈良末頃でなかろうか。⑪、⑫トレンチを除き他トレンチの初度客土中から古墳期以降の遺物は見受けられず、2度、3度目の客土中から見受けられるようになったからで、2度目をおそらく平安期初頭と考えた。理由は2度目の客土から普通古墳副葬品として出土する須恵器類が見受けられ古墳の破壊が考えられたのと平安初期以後の遺物が見受けられなかったからである。

カヤマ遺跡試掘調査報告書

—東県早牛ほ場整備工事にかかる
事前試掘調査—

発　行　　昭和57年3月23日
発行者　　青谷町教育委員会
発行責任者　教育長　塩　　修
印　刷　　勝美印刷株式会社 鳥取支店